

テーブル利用のススメ

前回の DX 推進室通信の最後、今回は Excel のブックからメールアドレスを読み込み、特定の人しか見ることのできないファイルを作る方法の紹介をする、と書いて締めくくりました。その内容を期待して今回の DX 推進室通信を読み始めた方には恐縮ですが、残念ながら今回の通信でそこまでの説明をすることはできませんでした。ごめんなさい…

今回は、フローで Excel ブック内のデータを使う場合に必要となる、テーブルの紹介をします。Excel のテーブルを御存知でしょうか。非常に便利で、フローで Excel ブック内のデータを使う時だけでなく、様々な場面でテーブルは利用されています。ですので、今回の内容も様々な場面で役に立つのではないかと思います。

Excel のテーブルは表の一種で、テーブルを使うとデータの管理や分析を容易にできるようになります。すでに入力されている表をテーブルにすることも簡単にできます。テーブルにする範囲を選択した後で「ホーム」タブにある「テーブルとして書式設定」から好みのテーブルスタイルをクリックして選択し、表示されたダイアログボックスの「OK」ボタンをクリックすれば選択範囲をテーブルにすることができます¹⁾。通常、表の1行目に各列のタイトルが入力されているので、「先頭行をテーブルの見出しとして使用する」にチェックを入れた状態で OK ボタンをクリックすることが多いでしょう。

このようにして表からテーブルにすると自動的にフィルターが利用可能になります。他にもテーブルで利用できる機能はいくつかありますが、特に便利なのが、データが増えた際にテーブルの範囲が勝手に拡張される機能です。テーブルを使ったことがない方には何を言っているのか分からないと思うので例を通して説明します。例えば、セル B2からセル B4までのセルに入力されている値の合計を求める数式は=SUM(B2:B4)です(図 1)。セル B5に新たにデータを入力したとして、それも合計に含めないといけない場合、図 1 のセル C2 を=SUM(B2:B5)と書き換えないと B5 を含めた合計を求めることができません(図 2)。ところがテーブルを利用していると、セル B5 にデータを入力した際にテーブルの範囲が勝手に拡張され、C2 セルを修正しなくても合計が得られます(図 3・図 4)。

図 3 中の SUM 関数の引数は テーブル1[数値] となっていますが、これは「テーブル1」という名前のテーブルの「数値」という見出しのついた列のデータ全体、ということを表しています。表をテーブルにした際に名前が自動で付けられますが、今回の例の場合にはセル B1からセル B4までをテーブルにした際にテーブル1という名前が付けられました。名前は後から自由に付け替えられますので、どのようなデータが入力されているテーブルか分かるような名前に付け替えるとよいです。なお、SUM 関数入力時にセル B2からセル B4までドラッグして選択すると、表示が B2:B4 から勝手にテーブル1[数値]に変わりますので、テーブル1[数値]とキーボードから入力しなくても大丈夫です。

これらの機能以外にも、テーブルにはいくつか利点があります。そこそきれいな表が簡単にできたり、計算式の修正が楽になったり、データを追加した際に計算式が自動挿入されたりと、テーブルにするだけで Excel が使いやすくなることも多いです。簡単にテーブルを利用することができますので、Excel でテーブルを使ったことがないという方はぜひ使ってみてください。

Power Automate のフローで Excel ブック内のデータを利用するにはテーブルにする必要がありますので、今回はテーブルの説明をしました。次回は Excel ブック内のデータをフローで読み込む方法について説明します。

数値	合計
2	=SUM(B2:B4)
4	
3	

図 1

数値	合計
2	9
3	
4	
6	

図 2

数値	合計
2	=SUM(テーブル1[数値])
4	
3	

図 3

数値	合計
2	15
3	
4	
6	

図 4

¹⁾ 後から範囲選択することもできますので、最初に「テーブルとして書式設定」からテーブルスタイルを選択しても大丈夫です